

書評

Michael B. First 原著，高橋三郎 監訳，下田和孝，大曾根彰 訳
DSM-5® 鑑別診断ハンドブック

渡邊衡一郎

2013年，米国精神医学会 (APA) より Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders, 5th Edition (DSM-5®) が発表され，翌2014年に日本語版が紹介された。しかしながら，現状はわが国でまだ広く浸透したとはいえず，いまだにその変更点，利点あるいは問題点についての特集が学術雑誌で組まれるほどである。

それはなぜだろうか。わが国の診断でこれまでより重んじられて来たのが世界保健機関 (WHO) による国際疾病分類 (ICD) であることも影響しているだろうが，それ以上に今回疾患カテゴリー群があまりに増えすぎてしまい鑑別が難しい，あるいはいまだに各カテゴリーがどのようなものか不明な点が多いことなどが理由として挙げられる。またわが国の精神科医は「うつ状態」「不安状態」など，旧来からの状態像診断が好きなのも一因として考えられる。

そのような状況で上梓された本書は，まずはパニック発作，高揚した気分，妄想，記憶喪失など状態像から入り，その後いくつかの鑑別を樹系図式に行うことで適切な診断が下せ，状態像から最終的に DSM-5® 診断に結び付けるこ

とが可能となっている。上述のわが国の精神科医の思考・判断パターンに合致した対応が可能となるのである。

評者も実際に本書でたどって見たが，不安症の見落としに気づき，へえとうなったほどである。またそれぞれ各疾患カテゴリーの鑑別をどうするかが分かり，そのことによって診断ポイントを改めて学べることも可能となっている。

DSM-5® には問題はまだあるものの，あまりに雑駁であった診断がこれまでより詳細に描写できるようになった。本書は研修医や若手医師にとって，診療をしていく上で必要不可欠となる診断を適切に下す際にきわめて参考になるとともに，いまだ DSM-5® をきちんと読破していない，理解しきれていない医師にもぜひ薦めたい。もちろん，DSM-5® を既に使っている医師が今一度確認のために使用するのにも重宝するだろう。本書は，あらゆる臨床医にとって必携の書と考える。

(杏林大学医学部教授・精神神経科学)

●B5 268頁 2015年5月 定価：本体6,000円＋税 医学書院刊